

項目	自己評価	中・長期経営目標	短期経営目標	主な取組内容	取組内容の評価指標	達成状況	改善方策	学校運営協議会による評価	学校関係者評価									
確かな学力	B	◆全国学力・学習状況調査(全国比+5P) ◆高知県学力定着状況調査(県比+3P)	①定期テストによる無回答率を下げる。 ②授業改善により、生徒や保護者に学力が定着していることを実感させる。 ③探究的な学習の場を授業に取り入れ、教科の本質に迫る授業を行う。	◇授業改善	香北中学校(授業)スタンダードを基本に、探究的な授業を行う。	・学校評価アンケートにおいて「授業が分かる」(90%以上) ・生徒アンケートでの「先生は授業を工夫している」で肯定的評価90%以上にする。	◆全国学力調査 国A+3.9B+9.8、数A+0.9B+10.1理+2.9であり、全教科+5Pは達成できなかったものの満足のいく結果である。 ◆県学力調査 <1年>国:70.2(69) 社65.6(56.5)数63.1(62.6) 理:64.3(57.1) 英:65.8(59.9) <2年>国:69.4(71.2) 社:56.1(58.1) 数50.3(51.2) 理:54.6(53.8) 英:50.1(55.8) ◇授業改善において、2学期より予習型授業へと転換を図る研究に取り組み、探究への教員の意識改革につながっている。 ・「授業が分かる」は、肯定評価87.5%、「授業を工夫している」は、92%と概ね達成できていると考える。	◇校内研修	分掌主任をリーダーとし、系統だった研修の推進を図り、成果→課題→要因を明確にする。	・校内研修が年度当初の計画に則り実施できる。 ・研究主題達成への道筋を全教員が意識し、実践できる。	◇校内研修は年度当初の計画に併せて必要に応じ、東部教育事務所(教師塾)による研修を実施。研究主題への意識を確認しながら、探究的な授業への修正も加えながら実践できた。	◇パワーアップタイム	ドリル学習を中心に、学力の定着を図る。	・学力の2極化が解消できる。	実施科目における教科担当が全クラスを見回り、生徒の能力や学習に対する進捗を把握できた。	・「授業が分かる」は、90%に達していないため授業改善への強化を図り取り組む。 ◇探究的な授業への転換について、さらに研究を重ね、バカロレア認定へ向けて研鑽を積む。	・授業風景が、学力向上を目指している様子が見られる。また、生徒同士の意見交換も活発に出来ている。 ・予習型授業による学力向上が出来ている。 ・校内研修の実施により、授業改善の努力が見られる。 ・次年度は、IBによる授業改善などで、教員への負担が増えないようにして欲しい。	A
				◇校内研修	分掌主任をリーダーとし、系統だった研修の推進を図り、成果→課題→要因を明確にする。	・校内研修が年度当初の計画に則り実施できる。 ・研究主題達成への道筋を全教員が意識し、実践できる。	◇校内研修は年度当初の計画に併せて必要に応じ、東部教育事務所(教師塾)による研修を実施。研究主題への意識を確認しながら、探究的な授業への修正も加えながら実践できた。	◇パワーアップタイム	ドリル学習を中心に、学力の定着を図る。	・学力の2極化が解消できる。	実施科目における教科担当が全クラスを見回り、生徒の能力や学習に対する進捗を把握できた。	・「授業が分かる」は、90%に達していないため授業改善への強化を図り取り組む。 ◇探究的な授業への転換について、さらに研究を重ね、バカロレア認定へ向けて研鑽を積む。	・授業風景が、学力向上を目指している様子が見られる。また、生徒同士の意見交換も活発に出来ている。 ・予習型授業による学力向上が出来ている。 ・校内研修の実施により、授業改善の努力が見られる。 ・次年度は、IBによる授業改善などで、教員への負担が増えないようにして欲しい。	A				
				◇パワーアップタイム	ドリル学習を中心に、学力の定着を図る。	・学力の2極化が解消できる。	実施科目における教科担当が全クラスを見回り、生徒の能力や学習に対する進捗を把握できた。	・「授業が分かる」は、90%に達していないため授業改善への強化を図り取り組む。 ◇探究的な授業への転換について、さらに研究を重ね、バカロレア認定へ向けて研鑽を積む。	・授業風景が、学力向上を目指している様子が見られる。また、生徒同士の意見交換も活発に出来ている。 ・予習型授業による学力向上が出来ている。 ・校内研修の実施により、授業改善の努力が見られる。 ・次年度は、IBによる授業改善などで、教員への負担が増えないようにして欲しい。	A								
豊かな心	B	◆規範意識の醸成と自尊感情の育成 ◆道徳教育の充実 ◆キャリア教育の充実	①毎日の出欠状況の把握と登校に向けての早めの取り組みを行う。 ②学校や学級に自分の居場所があり、安心して学校生活を送ることができる。 ③円滑な人間関係を築き、目標意識の高い生徒を育成する。	①特別支援コーディネーターを複数配置し、SC,SSWとも連携しながらケース会や相談活動、早期の対応を充実させる。 ②道徳の授業を充実させる。また、全校でSSTに取り組む。 ③清掃活動を縦割り班とし、行事の際にも縦割りでの活動を増やし関わり合う集団を多用なものにすることでコミュニケーション能力の向上と自尊感情の向上を目指す。	①30日以上欠席の生徒を0名にする。 ②道徳アンケート全項目80%以上にする。また、Q-Uにおける要支援群を0名にする。 ③自尊感情に関するアンケートで肯定的評価80%以上にする。	①30日以上欠席は3名であるが、一人は、給食からの登校もしくは授業に参加。一人は、部活動のみに参加できている。 ②道徳アンケートは、概ね達成できているが、「家庭で取り組む高知の道徳」について、24.3%と落ち込んでいる。また、「道徳の授業が好きか」74.3%、「自分たちの地域や高知県のために…」75.7% QU要支援2名(2年・3年) ③年度末調査において、78.6%と年度当初に比べ、-3.1P	①SCやSSWの力を借り、継続して支援に当たる。 ②道徳教科化に伴い、授業における位置づけは大きい。家庭や地域との連携において道徳教育を進めていく必要がある。QU要支援の生徒について経過観察 ③自尊感情に関する課題は、どの場面においても自信を持つことのできる生徒を育成する必要がある。そのために、SCIによる自己理解の授業を継続して行い、総合的な学習を中心に探究の授業に向けて、自ら考え、表現できる生徒の育成を行う必要がある。	・縦割りでの活動により、学校全体の雰囲気も良く、生徒、保護者とのつながりは、出来ていると思う。 ・成功事例だけでなく、失敗から学ぶ事で自信に繋がるので、色々な体験の出来る授業もあればよいと思う。	B									
				①特別支援コーディネーターを複数配置し、SC,SSWとも連携しながらケース会や相談活動、早期の対応を充実させる。 ②道徳の授業を充実させる。また、全校でSSTに取り組む。 ③清掃活動を縦割り班とし、行事の際にも縦割りでの活動を増やし関わり合う集団を多用なものにすることでコミュニケーション能力の向上と自尊感情の向上を目指す。	①30日以上欠席の生徒を0名にする。 ②道徳アンケート全項目80%以上にする。また、Q-Uにおける要支援群を0名にする。 ③自尊感情に関するアンケートで肯定的評価80%以上にする。	①30日以上欠席は3名であるが、一人は、給食からの登校もしくは授業に参加。一人は、部活動のみに参加できている。 ②道徳アンケートは、概ね達成できているが、「家庭で取り組む高知の道徳」について、24.3%と落ち込んでいる。また、「道徳の授業が好きか」74.3%、「自分たちの地域や高知県のために…」75.7% QU要支援2名(2年・3年) ③年度末調査において、78.6%と年度当初に比べ、-3.1P	①SCやSSWの力を借り、継続して支援に当たる。 ②道徳教科化に伴い、授業における位置づけは大きい。家庭や地域との連携において道徳教育を進めていく必要がある。QU要支援の生徒について経過観察 ③自尊感情に関する課題は、どの場面においても自信を持つことのできる生徒を育成する必要がある。そのために、SCIによる自己理解の授業を継続して行い、総合的な学習を中心に探究の授業に向けて、自ら考え、表現できる生徒の育成を行う必要がある。	・縦割りでの活動により、学校全体の雰囲気も良く、生徒、保護者とのつながりは、出来ていると思う。 ・成功事例だけでなく、失敗から学ぶ事で自信に繋がるので、色々な体験の出来る授業もあればよいと思う。	B									
健やかな体	B	◆体力及び技能の確実な定着 ◆基本的な生活習慣の確立	①授業でかわりを持たせるプログラムも積極的に取り入れ、体育が好きな生徒の割合を向上させる。 ②新体力テストのD及びE評定の生徒の割合を男女共減少させる。 ③食事と生活・健康について正しい知識を獲得し、規則正しい生活が行動化できる生徒を育てる。	①体育の授業で新体力テストの内容を、準備運動に取り入れる。 ②学校便りや学年便り、保健便りを通じて、保護者に対して生活習慣に対する意識を高める。 ③特活の時間や専門家による講演・ワークショップ等を通じてTVやスマホ・PCに費やす時間を学習や他の活動に充てる。 ④家庭科の学習や給食指導をおとして、食に対する意識を高める。	①アンケートで体育が好きな生徒が90%以上にする。 ①新体力テストのD及びE評定の生徒の割合を男女共に10%以下にする。 ②朝食を食べる割合が100%になる。 ③TVやスマホ・PCに1日2時間以上費やす生徒の割合を30%以内にする。 ④給食時に献立に関するコメントを放送する。	①男子95.3%・女子92.6% D及びE 24% ②83.8% ③平日2時間以上53.1% ④給食時、毎日放送ができた。	①体育の好きな生徒は多く、DEの評価の生徒はいるが運動ができない生徒はいない。今後体育の授業において探究の授業へと転換していく必要がある。 ②③学校便りや学級での呼びかけを継続する。 ④栄養教諭による指導と共に継続する。	・体力にも2極化があるようなので、家庭にも協力を求めなければならぬと思う。 ・ネットに対する依存度の高い家庭もあるかと思しますので、ネット依存に関するたよりなどを継続的に発信する必要があるように思う。 ・給食の献立に対するコメントを通じて、家庭内でも食に対する意識が高まればよいと思う。	B									
				①体育の授業で新体力テストの内容を、準備運動に取り入れる。 ②学校便りや学年便り、保健便りを通じて、保護者に対して生活習慣に対する意識を高める。 ③特活の時間や専門家による講演・ワークショップ等を通じてTVやスマホ・PCに費やす時間を学習や他の活動に充てる。 ④家庭科の学習や給食指導をおとして、食に対する意識を高める。	①アンケートで体育が好きな生徒が90%以上にする。 ①新体力テストのD及びE評定の生徒の割合を男女共に10%以下にする。 ②朝食を食べる割合が100%になる。 ③TVやスマホ・PCに1日2時間以上費やす生徒の割合を30%以内にする。 ④給食時に献立に関するコメントを放送する。	①男子95.3%・女子92.6% D及びE 24% ②83.8% ③平日2時間以上53.1% ④給食時、毎日放送ができた。	①体育の好きな生徒は多く、DEの評価の生徒はいるが運動ができない生徒はいない。今後体育の授業において探究の授業へと転換していく必要がある。 ②③学校便りや学級での呼びかけを継続する。 ④栄養教諭による指導と共に継続する。	・体力にも2極化があるようなので、家庭にも協力を求めなければならぬと思う。 ・ネットに対する依存度の高い家庭もあるかと思しますので、ネット依存に関するたよりなどを継続的に発信する必要があるように思う。 ・給食の献立に対するコメントを通じて、家庭内でも食に対する意識が高まればよいと思う。	B									
保護者地域との連携	B	◆CSの取り組みにより保護者・地域との連携を図り、協働体制を深める。	①保護者・地域と連携が図れている。 ②家庭学習の充実に保護者・地域が協力的である。	①CS(学校運営協議会)において、学校・生徒・保護者の目標や状況等を共有し連携を図る。	①CSにより学校の課題や悩みについて解消につなげることができる。 ①学P行事など、保護者との交流の機会をも持つことができた。 ①家庭や地域に情報発信(毎週の学年通信、毎月の学校だより、学期に1回のPTA広報、HP随時更新)ができた。	①CS委員の協力のもと、加力学習・部活動においてボランティアにおける外部指導者の紹介をしていただいた。 ①各学年とも学P行事を充実させ、保護者との交流が持てている。 ①情報発信については、肯定的評価83.1%	CS委員が自由に学校訪問ができる雰囲気づくりの必要性(授業風景・設備・学習環境・教職員等への意見をいただき生徒の充実した学校生活を送れるようお願いしたい)。	A										
				①CS(学校運営協議会)において、学校・生徒・保護者の目標や状況等を共有し連携を図る。	①CSにより学校の課題や悩みについて解消につなげることができる。 ①学P行事など、保護者との交流の機会をも持つことができた。 ①家庭や地域に情報発信(毎週の学年通信、毎月の学校だより、学期に1回のPTA広報、HP随時更新)ができた。	①CS委員の協力のもと、加力学習・部活動においてボランティアにおける外部指導者の紹介をしていただいた。 ①各学年とも学P行事を充実させ、保護者との交流が持てている。 ①情報発信については、肯定的評価83.1%	CS委員が自由に学校訪問ができる雰囲気づくりの必要性(授業風景・設備・学習環境・教職員等への意見をいただき生徒の充実した学校生活を送れるようお願いしたい)。	A										
特別支援教育	A	◆特別支援教育の理念を理解し、お互いを尊重し合える集団作りと、将来の社会生活にも行動化できる生徒を育てる。	①特別支援教育の専門性を共有し、個に応じた的確な教育がなされている。 ②日常生活を見なおし、生活の中に見られる矛盾や不合理をなくしていこうとする意欲が育つ。	①小中連携のもと、情報の交換や生徒の交流を図る(ユニバーサルデザイン:以下UDプロジェクト研修など)。 ②UDの視点に基づく授業を展開し、できるだけ障害を感じない授業を研究する。 ③各種の障害に関する理解と対処方法などの研修を深め、共通理解を図り取り組みを進め、ケース会・支援会では、本校担当のSCやSSWにも参加を依頼し、専門的な見地からのサポートをもらう。	①小中の情報交換と課題の共有のための連絡会が実施できた。 ②授業では、常にUDのある授業を行った。 ③ケース会・支援会等には生徒指導、SCやSSWが参加した。	①保小中管理職会を定期的実施し、情報交換ができた。 ②高知大学は永先生、福住先生を迎えインクルーシブ教育の考え方やソーシャルスキル教育の研修を行い、自己理解・他者理解・障害理解について深めることができた。 ③学年ごとのケース会、支援会を実施し、細かく共有することができた。	①②③継続して行う。	・保小中の連携や各専門機関の研修等により、個別の支援が出来ている。 ・山田高校や高知工科大学との連携について、考えてみてはどうかと思う。	A									
				①小中連携のもと、情報の交換や生徒の交流を図る(ユニバーサルデザイン:以下UDプロジェクト研修など)。 ②UDの視点に基づく授業を展開し、できるだけ障害を感じない授業を研究する。 ③各種の障害に関する理解と対処方法などの研修を深め、共通理解を図り取り組みを進め、ケース会・支援会では、本校担当のSCやSSWにも参加を依頼し、専門的な見地からのサポートをもらう。	①小中の情報交換と課題の共有のための連絡会が実施できた。 ②授業では、常にUDのある授業を行った。 ③ケース会・支援会等には生徒指導、SCやSSWが参加した。	①保小中管理職会を定期的実施し、情報交換ができた。 ②高知大学は永先生、福住先生を迎えインクルーシブ教育の考え方やソーシャルスキル教育の研修を行い、自己理解・他者理解・障害理解について深めることができた。 ③学年ごとのケース会、支援会を実施し、細かく共有することができた。	①②③継続して行う。	・保小中の連携や各専門機関の研修等により、個別の支援が出来ている。 ・山田高校や高知工科大学との連携について、考えてみてはどうかと思う。	A									